明治学院大学キリスト教研究所「2018 年度第 2 期アジア神学セミナー」レジメ
2018 年 12 月 3 日（月）　　担当　山本俊正（関西学院大学）

テーマ　：　現代社会とキリスト教　アジアの声にどう応えるか

■＜はじめに＞

●自己紹介・Faith Journey（信仰の歩み）

ーキリスト教との出会い

ーインドネシアの牧師、人々との出会い（ICYE の体験）

ー戦争の爪痕と企業進出のアジア体験

１）＜近代日本人のアジア認識―侵略と連帯の狭間から聞こえてくる声＞

●「和魂洋才」、「脱亜入欧」、「アジアは一つ」の内実は、「侵略」と「連帯」の両方向性を内包していた。

●「アジア」は１９世紀後半、文明度の低い地域と見なされていた。

●日清戦争、日露戦争の勝利とアジア。

●下関条約と日本人の中国観への変化。

●三国干渉と「臥薪嘗胆」→西洋列強に対する屈辱感とアジアへの「連帯」

●日露戦争の勝利と「東亜聯盟」の構想へ→アメリカで起きた日本人移民排斥運動の影響

●「白閥」と「白禍」（岡倉天心）"White Disaster"→日本が「アジアの盟主」となるスローガンの登場。「東亜聯盟論」、「亜細亜聯盟論」の背景。

●欧米の物質文明に対するアジアの精神文明の対比。→1909 年、イスラーム指導者アブデュルレシド・イブラヒムの来日。玄洋社（頭山満、内田良平）との親交。→アジアの「連帯」。

●アジアに対する「優越感情」と「人種的同胞感情」は、日本の帝国主義、「侵略」に収斂される。→「大東亜共栄圏」の幻想。

●近代の「アジア」認識と「アジア主義」→竹内好（よしみ）「アジア主義は、（中略）どんなに割引してもアジア諸国の連帯（侵略を手段とすると否とを問わず）の志向を内包している点だけには共通性を認めないわけにはいかない。これが最小限に規定したアジア主義の属性である。」→「抵抗としてのアジア主義」、「思想としてのアジア主義」

●日・中・韓の宗教者による「東北アジア平和共同体の構築」の議論→歴史的危惧としての「大東亜共栄圏」思想。

２＜アジア神学という Contextualization（文脈化）から聞こえてくる声＞

●東アジアの文脈に特化した神学。バルトやティリヒら 20 世紀の偉大な神学的巨人たちの神学との比較。古い神学の射程はどこまで延長可能か。

●文脈化神学は、「第三世界の神学」と特徴づけられることもある。→「第一世界」がもはやキリスト教神学の自明の発信地でなくなった。

●新しい神学の構築の試み：「解放の神学」「フェミニスト神学」「ラテンアメリカの神学」「アジアの神学」など。→伝統的神学は誰にでも適用可能な普遍的神学という前提。→

新しい神学は周縁部の「応用」編として位置づけられてきた。→普遍性を標榜する従来の神学は、その自己理解の通りに普遍的か？
●「文脈化」＝外来宗教の土着化」→土着化される以前の「純粋なキリスト教」は存在しない。→神学の根本的な出発点を神の「啓示」、文脈化神学は必然的な要請。啓示は、啓示の受け取り手を要求する。→神学は、文脈において生まれ、文脈の彼方へと視線を向けるのでなければ、神学とはならない。→聖書がわれわれの文脈に語りかける。
●文脈化神学 Contextualization.の問題点
→文脈化神学は各状況に応じて無限に細分化される可能性がある。
→シンクレティズムと２重信仰
３）＜アジアのエキュメニカル運動と宣教の歴史から聞こえてくる声＞
●世界宣教会議（１９１０）からの声
被宣教地域としてのアジア、インド代表として会議に参加した、Ｖ.Ｓアゼリアの発言　（私たちは皆さんに愛を求めます。私たちにどうか友人を送ってください！）平等な関係に基づくパートナーシップの不在。　宣教師による温情主義と干渉による一方的な意思決定であったことが伺える。アゼリアの欧米中心の宣教協力に対するこの痛烈な批判は、アジアにおける教会の意思決定プロセスがアジア人自身によって担われるべきであることを示唆していた。
●欧米宣教師運動からの声
アジアの欧米宣教師の役割を「アジアにおける教会誕生の助産士」とハンスウェーバーは呼んでいる。世界のエキュメニカル運動が「生活と実践」、「信仰と職制」、「国際宣教協議会」運動、更に「世界キリスト教教育協議会」がＷＣＣに合流して、教会の「一致」を求める運動として成立したのに対して、アジアのエキュメニカル運動は伝道と宣教をその根幹としていた。「世界のエキュメニカル運動における私たち（アジア人）の主要な関心は、宣教師運動が世界教会のビジョンの中心課題となることです。」（D.T.ナイルズ）

●国際宣教協議会（ＩＭＣ）の成立とタンバラム会議からの声
世界宣教会議（１９１０、エディンバラ）で継続委員会が設置される。（委員長はジョンＲモット、委員として、「より若い教会」から３人、インド、中国の代表に加えて日本のメソジスト教会監督、本多庸一が選出される）ジョンＲモットの訪問活動はアジアのエキュメニカル運動発展の基礎となった。各国に教会協議会（ＮＣＣ）が誕生する。国際宣教協議会（ＩＭＣ）成立し（１９２１）、第２回国際宣教会議が（１９３８年、インド、タンバラム）で開催された。タンバラム会議はアジアのエキュメニカル運動の出発点と言える。（国際的な教会機構の意思決定プロセスに、より多くのアジア人が参加することの必要性が広く認識された）。タンバラム会議でＩＭＣ機構の脱中央集権化の問題が提起され、ＩＭＣの「極東」事務所開設の可能性が協議された。しかし、東アジアの地域機構の設置は、エキュメニカル運動に分裂をもたらすのではないかという危惧の表明されていた（ＷＣＣ／ＩＭＣ）。

●WCC の誕生とバンコク会議からの声
ＷＣＣ誕生（1948 年）後、東アジアキリスト者会議（EACC）が開催された。（ １９４９年１２月、バンコク）アジアの地で開催される、アジア人によって準備、組織され、大多数の参加者がアジア人で構成された最初のエキュメニカル会議。会議の主題は「変動する東アジアにおけるキリスリ者の課題」であった。アジアにおける IMC/WCC 共同地域事務所開設の可能性に関して討議し、IMC/WCC が共同のアジア担当幹事をアジア人のなかから任命し、それを財政的に支えることが全会一致で決議された。しかしこの決定は同事務所を設置しないという決定と同じであると受けとめられた。財的資源も意思決定権も持ち合わせていないアジアの教会の姿を反映していた。ラジャ B マニカムが最初のアジア担当幹事として IMC/WCC によって任命される。(マニカムの WCC 総幹事、フィサトーフトへの手紙）
●アジア・エキュメニカル宣教協議会からの声とＣＣＡの成立
IMC/WCC 関係者によって表明された地域主義（regionalism）への危惧と警戒感は西欧の植民地支配と中央集権的コントロールを想起させた。チャールズ・レバー （米国合同長老教会宣教団の総幹事）は１９５４年にアジアの教会指導者を香港に招き、非公式な協議会を開催。会議の成果としてアジア・エキュメニカル宣教協議会（Asia Council on Ecumenical Mission=ACEM）が設立（１９５５）。ACEM の構成メンバーは欧米の宣教団プラス、フィリピン、タイ、韓国、日本、中国などの長老教会、合同教会、改革派教会。日本からは日本基督教団が参加した。しかし、構成メンバーは少数のプロテスタント教会に限定されていた。フィリピン合同教会の監督であったエンリケ・ソブレピナは ACEM 設立の報告のために１９５５年の WCC 中央委員会に出席し、新しいアジアでの組織成立を報告したが、ＷＣＣ中央委員会からは批判と反対の声が続出した。（アジア・エキュメニカル宣教協議会という組織名の「エキュメニカル」と「アジア」とういう言葉の使い方に批判が集中した）。

４）＜応答：戦後の日本の教会の歩みと歴史認識―エキュメニカル運動との連携＞
●戦後の日本のキリスト教会の出発点：東アジアでの戦争に加担した教会の深い反省と悔い改め。
●日本基督教団は、鈴木正久議長名で「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」（１９６７年）を発表。
●戦後 50 年を迎えた 1995 年に出された様々な声明：①日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）、中嶋正昭議長名の声明。「神とアジアの隣人に赦しを乞い」新たな平和の歩みを誓う。②日本福音同盟（ＪＥＡ）「戦後 50 年にあたってのＪＥＡ声明」の採択。その他、日本カトリック司教団、沖縄バプテスト連盟、日本カトリック正義と平和協議会、日本福音キリスト教会連合、明治学院、等が声明を発表。
●1995 年以前の声明：①「日本基督改革派教会創立３０周年記念宣言」（1976 年、日本基督改革派教会）②「戦争責任に関する信仰宣言」（1998 年、日本バプテスト連盟）、③「戦争責任」に関する悔い改め（1992 年、日本バプテスト同盟）、④「第二次大戦下における日

本ナザレン教団の責任についての告白」（1993 年、日本ナザレン教団）、⑤「宣教１００年信仰宣言、明日の教会にむかって」（1993 年、日本福音ルーテル教会）などがある。
●日本の教会のエキュメニカル運動（教会一致運動）への参加と連携。
●1980 年代：ＮＣＣ（日本キリスト教協議会）を中心に中国と朝鮮半島（韓国・北朝鮮）との教会交流の開始。

５）＜応答：日本と中国の教会交流と連帯＞
●１９８３年に第１回訪中団を派遣。翌年、１９８４年に第１回中国基督教協会訪日団を迎える。中国教会と日本の教会の公式な関係が開始。→ＮＣＣは、日本の教会の戦争責任を告白。→１９８７年以降、日本語学教師の派遣。
●１９９６年春に、第２回ＮＣＣ訪中代表団が中国を訪問。１９９９年には、第２回中国基督教協会訪日団を受け入れ。→日本の中国への侵略を書面で、改めて謝罪。
●２００４年９月、第３回 NCC 中国教会訪問代表団が派遣される。2007 年には中国キリスト教両会（中国基督協会及び三自愛国運動）が訪日。第４回の相互訪問は、2009 年に日本から中国へ、翌年、2010 年に中国からの正式訪問団を受け入れる。2017 年 5 月 NCC 訪中団の派遣。

６）＜応答：日本と朝鮮半島の教会交流と連帯＞
●１９８４年１０月、日本の御殿場、東山荘で開催された世界教会協議会（WCC）主催の「東北アジアの正義と平和」会議。→東山荘プロセス。
●８５年には、ＷＣＣ代表団が、８６年には米国ＮＣＣ代表団が、北朝鮮を訪問。８６年に、スイスのグリオンにて、ＷＣＣ主催で会議。→南北のキリスト者代表が出席。和解を象徴する聖餐式を共にする。
●８７年５月、日本のＮＣＣは、隅谷三喜男、中嶋正昭、前島宗甫の三人の代表を北朝鮮に派遣、 朝鮮キリスト教連盟（ＫＣＦ）を訪問。
●在日大韓基督教会は、８９年７月に代表団６名が北朝鮮を訪問、交流を開始。
●１９９５年、北朝鮮の大規模洪水被害を契機に、日本のＮＣＣ及び在日大韓教会、アジア及び世界のエキュメニカル運動は、北朝鮮への人道支援活動を開始。→朝鮮半島の平和と和解の取り組み、2013 年の WCC 総会（釜山）でも声明が発表され、エキュメニカル運動の課題として確認。
●韓国民主化運動への日本の教会・キリスト者の連帯→ＴＫ生による「韓国からの通信」(岩波書店)
７）＜応答：個別教会レベルでの取り組み＞
●戦後、長期に亘って韓国の教会と姉妹教会関係を継続した教会：日本基督教団の西片町教会と百人町教会。
●西片町教会は 1975 年からソウルチェイル教会と、百人町は 1979 年から蚕室(チャムシ

ル）中央教会と姉妹教会関係を締結。

●「この告白と懺悔を真実のものとするために、西片町教会は1970年以後の韓国民主化運動に献身するソウルチェイル教会との連帯に踏み切り、姉妹教会の締結に至りました」（西片町教会の山本裕司牧師）

●「百人町教会は基本的に日本の戦争責任告白の路線を歩んでいた。アジアに対する戦争責任を担って行こうという姿勢であった。そうした姿勢の中で朴先生との出会いがあった。蚕室(チャムシル) 中央教会が韓国の民主化闘争を担っている若者を育て、ともに苦闘している教会であることを知り、時代の精神をともにすることができる教会であることを皆が感じ、木田先生がプロポーズしたのです。」（百人町教会、阿蘇敏文牧師）

８）＜応答：平和憲法９条を活かす働き＞

●２０世紀の前半、東アジアで起きた戦争：日清戦争、米西戦争、日露戦争、第一次大戦、シベリア出兵、山東出兵、満州事変、日中戦争、第二次大戦、大多数は、日本が単独で起こした戦争。

●戦争犠牲者の数：日清戦争（1 万 7000 人）日露戦争（１０万人）、アジア・太平洋戦争（２３０万人、内８０万人以上が民間人）１５年間の戦争を通じて日本軍によって殺害された中国人１千万人を越える。東南アジア諸国のを加えれば、犠牲者の総数は１８００万人を越えるという推計も出されている。

●１９４６年に生まれた日本国憲法：第一項、「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」。第二項、「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」

●個人による非暴力主義の表明は比較的容易かも知れないが、個人を超えて、国家が非暴力の理想を宣言した条項として画期的である。

●『新しい憲法のはなし』:「こんどの憲法では、日本の國が、けっして二度と戦争をしないように、二つのことを決めました。その一つは、兵隊も軍艦も飛行機も、およそ戦争をするためのものは、いっさいもたないということです。･･･しかしみなさんは、けっして心細く思うことはありません。日本は、正しいことを他の國よりさきに行ったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません。」（憲法制定直後、文部省が発行）

●戦後、「悔い改め」の証として誕生した平和憲法は、過去に被害を受けたアジアの人々にとって、日本が２度と「戦争をする国」にならないための、大きな歯止めであった。「９条」はアジアの人々にとって、自分の平和と命を保障してくれる、「生命保険」。

●旧約聖書のイザヤ書２章４節には、「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。」という言葉。（国連ニューヨーク本部モニュメント）

●旧約聖書のヨエル書４章１０節には、まったく逆の言葉が書かれている。そこには「鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ」（当時の現実に近かかった）

●イザヤ書は、この句を逆転させて、武器を捨てて平和を選び取る意志、「戦わない」意志を明確に示している。これは憲法９条ができた時の動機に、非常によく似ている。→預言者イザヤが活躍した紀元前８世紀は、イスラエル民族の二つの王国のうち、北のイスラエル王国がアッシリアに攻め滅ぼされ、南のユダ王国も戦乱の悲惨に巻き込まれていた。→預言者イザヤは、いつの日か、このエルサレムを多くの国々が敬意を持って仰ぎ見ることになると告げた。しかしそれは、今はみじめな敗戦国だが、いつか力を回復し、強くなって他の国々に君臨するようになる、という復讐の宣言ではなかった。→「国は国に向かって剣をあげず、もはや戦うことを学ばない」（イザヤ書２：４）ｃｆ：日本国憲法の前文には、「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」

●敗戦後に定められた日本国憲法は、もはや「戦わない」意志を明確に示したものであった。憲法９条はまさにイザヤの非暴力のビジョンに通底している。憲法９条は個人ではなく、国家が「非暴力宣言」をしたことで、東アジアを含めた世界の国々から敬意をもって迎えられた。

●日本の教会及びキリスト者が現在なすべきことの一つは、預言者イザヤのビジョンを再度受け継ぎ、平和憲法９条を継承することに努力することではないだろうか。

●日本の NCC の呼びかけで第１回「９条アジア宗教者会議」を 2007 年１１月に、東京の在日大韓 YMCA で開催。第 2 回会議を 2009 年 12 月にソウルで、第３回会議を 2011 年 10 月に沖縄で開催。第４回会議は 2015 年 12 月に東京で再び開催、2016 年には大阪で第 5 回会議を開催。2018 年 6 月に第 6 回会議を広島で開催している。

●「憲法 9 条にノーベル平和賞を」→ノーベル委員会が推薦を受理。

●日本の教会及びキリスト者が現在なすべきことの一つは、預言者イザヤのビジョンを再度引き受け、平和憲法９条を継承すること。

９）＜ドイツから聞こえてくる声と応答ー城の教会の「豚」と「エリゼ条約」＞

●城の教会（castle church)-ルターの宗教改革由来の教会

●戦争責任として加害の記憶を想起する。

●1963 年の独仏協力条約（エリゼ条約）→青少年交流事業です。13 歳から 30 歳までの若い世代の交流プログラム。青少年交流事業に参加した人が 50 年間で 800 万人。年間で 16 万人の若者が相手国に一定期間滞在。

●ドイツとフランスの人口は合計で約 1 億 5000 万人。日本と韓国の人口を合わせると、約 1 億 7000 万人。→日韓の間で年間 16 万人の若者が交流をする計算。中国を加えると、人口の合計は 15 億を超える。10 倍の年間 160 万人の交流。

１０）＜応答：NGO との共同の取り組み事例ー南北コリアと日本のともだち展＞

●日本、韓国、北朝鮮＋中国の子どもたちによって描かれた絵画展が毎年、日本、韓国、北朝鮮を開催場所として実施されている。

●目的は「２１世紀を平和の世紀にしたい」、「北東アジアに生きる隣人でありながら、今は

自由に出会うことはできないけど、絵やメッセージを通して出会いの場を作って行こう」

●日本の様々なＮＧＯ（ＪＶＣ、地球の木、ピースボート)、ＮＣＣ、アーユース、ＹＭＣＡなどキリスト教を含む宗教系の団体が共同。

●２００１年から開始。前史として、１９９５年に北朝鮮で起きた大雨による洪水大災害。→ＮＧＯのネットワークの形成。→韓国のＮＧＯとの連携。→「北朝鮮人道支援日韓ＮＧＯフォーラム」の開催。「南北オリニ・オッケドンム」と運命の出会い。「オッケドンム」は「肩を組み合う友達」を意味する。→「北朝鮮の子どもたちと自画像とメッセージを交換している」

●冷戦状況が続き「抑止論」が幅を効かせた、北東アジアの歴史の中で、「ともだち展」の歴史は、平和創造の対抗軸として、抑止論を克服する「信頼の醸成」「対話の継続性」など有効な倫理的価値を示し続けている。

■＜おわりに＞

●実線の関係から点線の関係へ→「人と人とのつながり」を構築し、「顔の見える」関係を作る。それは遠回りのように見えて、実は、アジアの声に応答する近道。

→日本の教会が東アジアの「異質な他者」との出会いと交流を更に続けて行くこと。

以上